

土間の魅力

コミュニティの香りを求めて

富田 真二
富田建築設計室

人口26万の地方都市・四国の徳島。この地で設計事務所を始めて早15年が過ぎるが、建築仲間に恵まれたこともあって、郷土の古い民家や町並み、社寺建築などを見て回る機会が多くある。ここ10年、私の見た好きな徳島のことを少し紹介させていただきながら、いままでの私自身の設計活動を振り返ってみたいと思う。

私の好きな徳島の風景

県内の平野部や山間部には、堂々とした茅葺き屋根の古い民家がまだ残されている。広い土間に単純な間取り、部屋の前には濡れ縁と決まった造りであるが、これらはいつもの心地よさを与えてくれる。身近な郷土の民家や町並みから教えられることは多くある。その一つに、県南の漁村集落に見られる「ミセ造りの町並み」がある。間口が二間から三間ほどの民家が軒を寄せ合うように連なり、魅力的な路地空間をつくり出している。間口が狭い分、通風や採光確保のため、通りに面しての開口窓は貴重である。雨戸の戸袋さえ取る余裕はない。そこで考え出されたのが、ミセ造り（ブチョウ、ブッチョウなどとも言う）と呼ばれる上下に分かれた雨戸形式である。上の雨戸は軒裏に納め、脚を付けた下の雨戸は倒して縁台に使う。京の揚見世の形式と同じである。合理的に造られた漁船と同じように、ミセ造りにも空間を無駄なく利用する漁師気質が表れているような気がしてほほえましく感じたものだ。この開かれた縁台は通りを挟んで向かい合い、コミュニティ形成の重要な役割を担っているかのように見える。戦前までは、どの家にもこのミセは付いていたらしいが、いまミセ造りの町並みとしての景観が残されているのは、牟岐町出羽島と海部町鞆浦集落の二カ所だけになった。過疎化や高齢化が進む集落、しかし、鞆浦集落は高齢者の自殺率が全国一少ない町と聞いたことがある。プライバシーの取りにくいミセ造りの住まいが、逆に共同意識を育む力になり、一人暮らしの孤独さを救っている。

四国第二の高峰、標高1955mの剣山。その周辺には方三間のお堂が散在している。堂内には仏像が安置され、地域



写真1 鞆浦集落のミセ造りの民家



写真2 美郷村の谷の四足堂

の人々の心の支えになっている。自らが管理し、祈祷、先祖供養、盆踊りなど、各種の宗教行事が行われている。また、地域の寄り合いの場としても使われ、剣山信仰の修験者たちへの休息の場にもなっている。壁のない吹き放しのお堂は、12本の柱だけで大きな屋根を支える単純な形。それゆえに素朴で力強い印象を受ける。茅葺き屋根のお堂は



写真3 蔭敷町百合谷の農村舞台

めっきり見かけなくなったが、段々畑や山並みを背にして建つ姿は美しく、こころ和む風景である。

一方、剣山南側の那賀川流域沿いには、人形芝居（浄瑠璃）を演じるための農村舞台が、いまでも神社境内に数多く残されている。藩政時代、阿波蜂須賀公の支配下にあった淡路。そこで生まれた人形芝居は、阿波の民俗芸能としていまでも多くの人に愛されている。江戸時代から戦前にかけて、村人たちの唯一の娯楽であった人形芝居は、県下のいたるところで上演されていた。神への感謝の気持ちを込めて、自らが人形を操り楽しんだ。そのほとんどの舞台は村人総出で築き上げたもので、お堂同様、素朴な建物となっている。現在、人形芝居を上演している舞台は二棟だけになり、崩壊寸前の舞台が多い。静まり返った山あいの中に、忘れられたようにひっそりとたたずむ舞台の前に立つと、一つの娯楽を村人総出で楽しんだ当時が回想され、郷愁を誘う。

ミセ造りの町並み、お堂、農村舞台と私の好きな徳島を紹介してきたが、これらには共通してコミュニティの香りが漂っている。共存共栄の精神が町並みや建物に素直に反映されており、こころの風景を創り出している。

土間の魅力

ここ数年の建築雑誌には、時折土間を持つ家が掲載され、小さなブームになっている。かつての炊事や作業場としての土間は、戦前まではどの家にも見られたものであるが、瞬く間に姿を消してしまった。土間だけに限らず、新しく建てられる家には、広縁や濡れ縁などの縁側空間を見かけることもめっきり少なくなった。戦後の急激な近代化の流れの中で、人々は西欧文化にあこがれ、洋風住宅を夢見た結果、忘れ去られて逝ったものたちの代表格であろう。

いま、なぜ土間なのか。土間が見直されつつあるのか。私もここ数年間、土間をテーマとして、その魅力を探り続

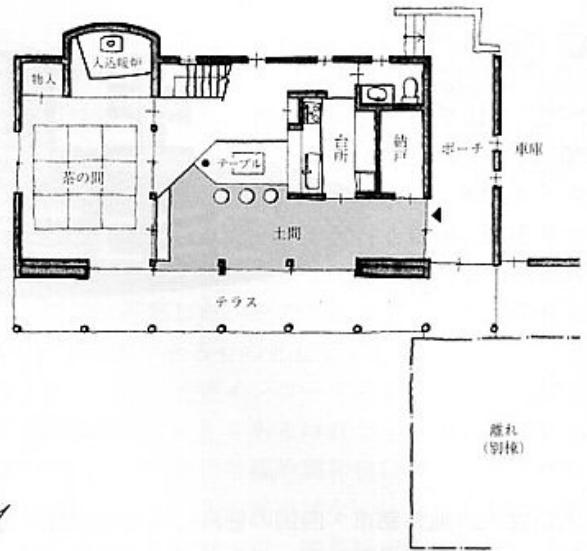


図-1 川内町の家 平面図

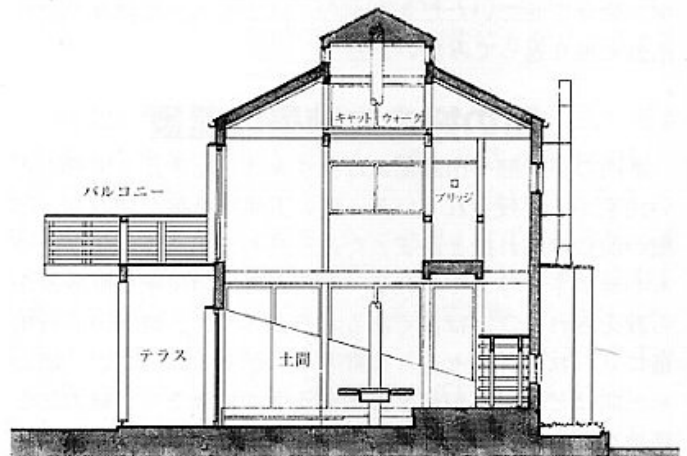


図-2 川内町の家 断面図

けている。四国山脈の豊かな森林資源を背景に、設計する住宅は地場材を使った木造がほとんどである。土間をテーマに設計した木造住宅を紹介させていただきながら、いまの取り組みをお伝えすると共に私自身の整理としたい。

川内町の家（木煉瓦の土間の家）

この住宅はかろうじて田園風景の残る徳島市の郊外にある。農機具の修理販売を仕事としている家人の住まいであり、周りには大きな農家が点在している。

ここでは庭から室内へと連続する土間空間を造ろうとした。土間は内と外を巧みに繋げる力を持っている。家の中心に土間を据え、テラスを介して庭と繋がる配置とした。四季のうつろいを日常生活の中に取り込むこと。その仕掛として、土間とテラスを仕切る建具は四間幅でフルオープンし、戸袋に納まるようにしている。開くと内と外は一体化し、敷居のレールのみが内外の結界を表すことになる。

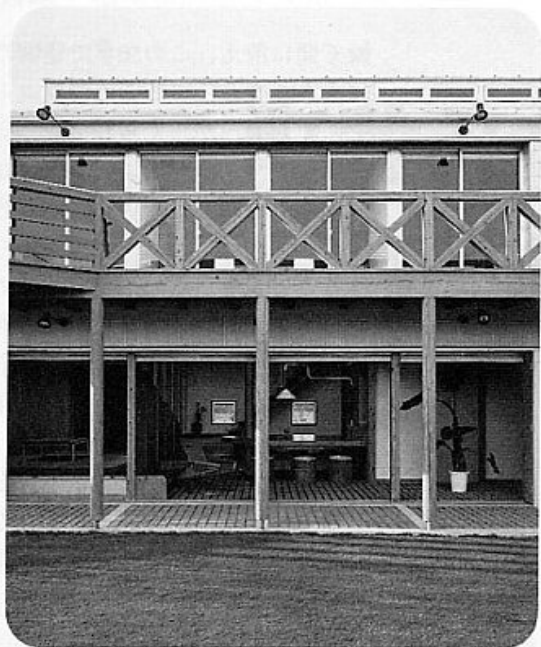


写真4 川内町の家 (撮影:小川泰祐)

日本の住まいは自然を上手く取り込みつくられてきた。厳しい自然から身を守りながらも、自然を愛し自然と共に生きてきた。名もない草花に心痛め、襖一枚で仕切られた隣室に気配を感じ、気遣いのこころを育んできた。俳句が、そして和歌が生まれ、日本固有の文化をつくり上げてきた。

土間の芯に据えられた囲炉裏付きの大きなテーブルの前に座ると、土間からテラス、芝生の庭、そして田園へと広がる景色が見える。市街化調整区域の法に守られて、最高の贅沢をこの家は持っていると感じている。

大松町の家

この住宅も徳島市の郊外に建つが、こちらの方がやや市街化は進んでいる。住人は若く30代前半のご夫婦とその家族のための住まいであり、明るい性格のご夫婦には友人も多い。

ここでは来客を歓迎する仕掛として、玄関へのアプローチには広いデッキを、また接待できる広い土間空間を造りたい考えた。先述のミセ造り民家調査の時、その家人からこんな話を聞いた。

「いまの家は来客を追い返すような造りになっている。昔の家は長居できたものだ。」

この言葉は長く私の耳から離れなかった。確かにその家も、玄関戸を開けると通り庭と呼ばれる細長い土間があり、ミセの間に腰掛けてこの話を聞いた記憶がある。

本来玄関は武家や庄屋など格式を重んじる家に備わっていたものであり、庶民の家にはなかった。いつの間にか住宅の玄関は、一坪ほどのスペースが標準となり造られてきた。下足入れなど収納には力を注ぐが、肝心の来客への歓

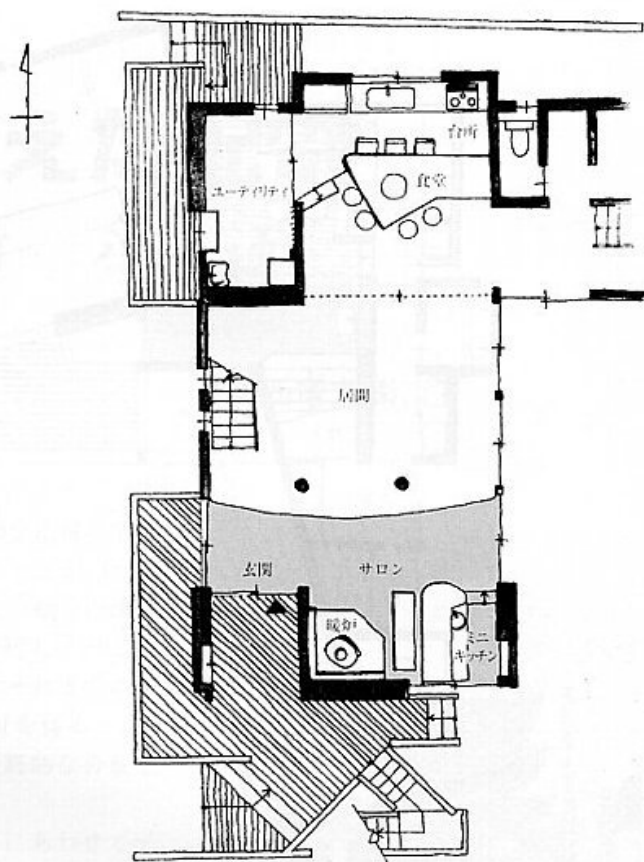


図-3 大松町の家 平面図

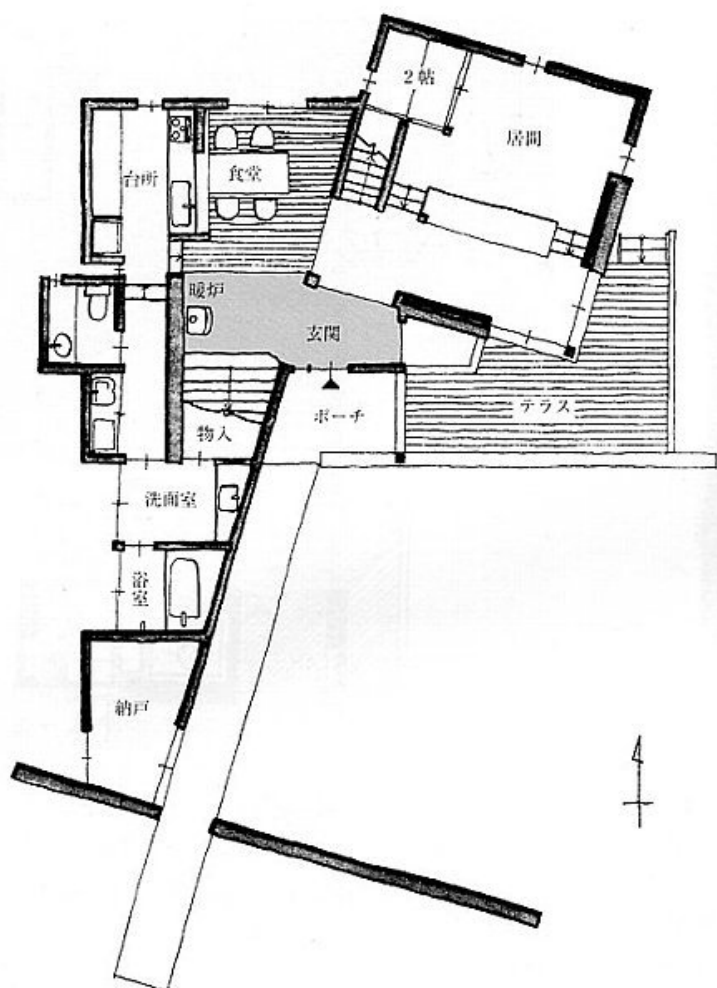
迎の心は置き去りにされてきた。そこにはただ豪華に見せるだけの吹き抜け空間があったりするだけで、長居しづらい見栄の空間にしか私の目には映らない。

歓迎の気持ちを表す玄関とはどのようなものか。どう造ればよいのか。この住宅では、薪ストーブ（暖炉）とミニキッチンを用意することで、居心地よい空間を造ろうと試みた。暖炉の炎が、友人だけでなく訪れる人すべてにその気持ちを伝える。対面のミニキッチンでの会話が弾む。オープンなLDKとの繋がりが、この家のおおらかさをより端的に表していると思っている。

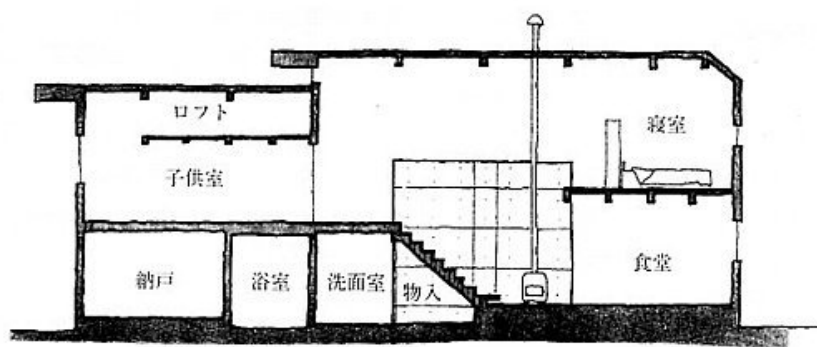
長生町の家

この住宅は県南の阿南市の郊外、田園地帯の中にある。農家の分家として建てられた住まいで、ご両親の住まいを初め、周りには一軒農家が点在している。競艇選手のご主人はまとまった休日を利用して、無農薬の米作りに精を出している。

ここでは自然や近所と密接に関わって暮らすことをテーマに、室内と自然とを繋げる大きなデッキテラスや野良仕事途中の作業着姿でも気軽に立ち寄れる土間空間を造りたいと考えた。玄関から直接つながる食堂の床は、杉の糞の子で作り、季節や用途に応じ取り外しできるようにしている。台所と食堂は対面キッチンとし新しい形を取り



図一4 長生町の家 平面図



図一5 長生町の家 断面図

入れてはいるが、精神は昔のオクドの世界であり、かつての農家の再現だと思っている。先述の「大松町の家」と同じ薪ストーブとの組み合わせで、立ち寄りやすく長居しやすい家をめざし

た。

以上、私の設計した三つの住宅を取り上げ、土間の魅力を感じるままに書き綴ってきたが、この土間空間も戦後

瞬く間に消え、この50年で建物の様相は大きく変わってしまった。コミュニティセンターが建てられても、それは名ばかりで、コミュニティの香りはどこからも漂ってこない。住宅も然りである。個の欲望は内へ内へと膨らみ留まることを知らない。いま、求めても求めても満たされることのない物への欲望の恐さに、心ある人は気づき始めている。地球環境問題を初め、現代社会に突き付けられた課題は山とある。いま、その真っ直中で設計を業として暮らしているが、現代の住宅がなくなったものは？…… どうすればそれを取り戻すことができるのか？…… 先述の町並みや農村舞台を教訓として、ここ数年、家造りに取り組んできたような気がする。いまも、はっきりとした答が見える訳ではないが、「個の欲望を捨てること」をキーワードとして、あの懐かしい香りが感じられる建築を造りたいと思いつけている。

【筆者紹介】

富田 真二

(昭和23年8月22日生・徳島県出身)

富田建築設計室 主宰

〒771-01 徳島市川内町小松東58-15-301

TEL : 0886-65-6506

FAX : 0886-65-6507

<趣味> 古建築の調査

<定期購読誌・紙>

新建築、住宅特集、住宅建築ほか

<家族構成> 妻、長女、次女

<主なる業務歴及び資格>

昭和57年(1982)年、富田建築設計室開設、現在に至る。

「徳島県建築設計コンクール優秀賞」
「徳島市街づくりデザイン賞優秀賞」受賞。
穴吹カレッジ非常勤講師。

富田建築設計室

<代表者> 富田真二

<住所>

〒771-01 徳島市川内町小松東58-15-301

TEL : 0886-65-6506

FAX : 0886-65-6507